東南アジア研究　44巻3号　2006年12月

現地通信

「伝える人」になるために
―― ラオス地方文書（じかたもんじょ）探索の旅から ――

増　原　善　之*

ラオスの人たちは総じて奥ゆかしい。面と向かって他人を罵ったり，声高に批判したりするという光景に出くわすことはまずないと言っていい。しかし，時として一切の婉曲的表現を排し（子供のような率直さで），こちらが一番言ってもらいたくないことを指摘されてしまい，言葉を失うことがある。

それは数カ月前，ラオスS県在住の郷土史家Aさんにお話を伺っていたときのことである。

「村の歴史についてお年寄りたちにインタビューするとき，『子どもの頃，布や紙に書かれた古い文書を見たことはありませんか』ときいてみることにしているのですが，いつも決まって『子どもの頃，見たことはあるけれど，今ではすっかりなくなってしまったね』と同じ答えが返ってくるのです。本当に全部なくなってしまったのでしょうか」と真面目な顔をして尋ねる私に，Aさんは顔をわずかに左右に振りながら，一言つぶやいた。

「君はまだまだだな」

このやり取りの含意を理解してもらうためには，ラオスの文献史料および社会主義革命（1975年）以降の政治・社会状況について若干の説明が必要かもしれない。

ラオスの文献史料について語るとき，まず，あげなければならないのが「バイラーン文書（貝葉文書）」である。これは，ラオス語で「ラーン」と呼ばれるヤシ科の植物の葉を細長い長方形に切りそろえ，その表面に鉄筆で文字を刻んだものを紐で綴じた文書で，内容は仏教経典，民話，歴史，法律，占星術，呪術，薬学，慣習，儀礼等多岐にわたっている。1992年から2002年にかけて，ラオス情報文化省はドイツ政府の支援を受け「ラオス・バイラーン文書保存プロジェクト」を実施し，ラオス全土で376,000束におよぶバイラーン文書を調査・登録し，このうち54,000束あまりをマイクロフィルムに撮影した。[1)] これらの文書は主として仏教寺院で保存されてきたものだが，村人たちが自宅で保管している場合も少なくない。いずれにせよ，これだけ膨大な量のバイラーン文書が，今なお寺院に保存されていることは，ラオスでは伝統的に「バイラーン文書の写本を作り，寺院に奉納すること」が大いなる功徳行為の一つと見なされてきたという事情による。しかし，すでに存在している写本をさらに書き写す ―― その過程で単純な写し違いはもちろん，意図的な加筆，修正および削除もあったに違いない ―― ことで再生産されてきたバイラーン文書は，現在進行中の出来事を記録するという同時代性に乏しいため，歴史研究に使用する場合，種々の制約があることも否定できない。その意味で後に述べる「行政文書」などとは異なるカテゴリーに属する史料と言える。

ところで，ラオスには公文書館に類するものが存在せず，ラオス国立図書館もバイラーン文書以外の古文書を収集・保存していないため，歴史研究者がラオスにおいて公文書館や図書館に通って行政文書などの同時代史料を調査することは初めから無理な話である。したがって，このような古文書を本当に研究したければ，自分でラオス全土を歩き回って史料を探し出すしかない（ラオスの歴史研究は文字通り「フィールドワーク」である）。残念ながら，ラオス国内に現存するバイラーン文書以外の古文書につ

* Masuhara Yoshiyuki, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科21世紀COE研究員；Research Fellow, The 21st Century COE Program, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

1) Dara Kanlaya. 2005. The Preservation of Palm-leaf Manuscripts in the Lao PDR. In *The Literacy Heritage of Laos: Preservation, Dissemination and Research Perspectives*, p. 35. Vientiane: The National Library of Laos.

いて，まとまった調査はなされておらず，この分野の研究は依然として手探りの状態にある。そうした状況もあって，歴史研究者の間ですら，行政文書等の同時代史料が存在しないことを前提とし，新史料の探索を初めから諦める向きがあった（お恥ずかしい話だが，少し前までは私もそのうちの一人であった）。

その一方で，バンコクのタイ国立図書館古文書部には，ラオス・ラーンサーン王国期の行政文書が数十通保管されている。これらの文書の多くは，木綿布やサー紙（クワ科のカジノキから作られた紙）に墨や鉛筆で書かれたもので，国王による地方国首長の任命，地方国の領域，領民支配，国王への貢納，地方国の特産品の取扱いなどに関する記事を含んでおり，ラーンサーン王国の地方統治制度を研究する上で不可欠の同時代史料である。これらは，同王国の歴代国王から現ラオス・ホアパン県にかつて存在した地方国の首長たちに送付された文書が中心であり，1880 年代に南中国からラオス北部一帯に侵入してきた中国匪賊ホー族を討伐するため，同地に派遣されたシャム（タイ）軍によってバンコクに持ち去られたものと伝えられている。タイ国立図書館であれ，どこであれ，ラーンサーン王国期の行政文書が現実に存在しているという事実は，今後，地道に探索を続けていけば，ラオス国内でもこの種の行政文書が発見される可能性があることを示している。

郷土史家 A さんとのやり取りに話を戻そう。

言うまでもなく，私が村のお年寄りに「布や紙に書かれた古い文書」について尋ねているのは，このようなラーンサーン王国期の行政文書を念頭においてのことである。しかし，そのありかを尋ねても「子どもの頃，見たことはあるけれど，今ではすっかりなくなってしまったね」という同じ答えしか返ってこないというわけである。

バイラーン文書を除いて，現存する史料の量が極めて少ないことについては，これまで様々な説明がなされてきた。例えば，① 伝統的にラオス人は（中国人などと違って）物事を「記録する」という意識が乏しく，行政文書であれ商業文書であれ，これまで作成されてきた文書の量自体がもともと少なかった。また，② 中国の歴代王朝などに比べて，ラーンサーン王国の官僚機構は未成熟であり，その根幹を成す文書主義も未発達だったので，行政文書の作成数も少なかった，などである。これらは作成された文書自体が少なかったという観点からの説明である。さらに，かつて存在した文書が消失していった原因としては，③ ラオスの高温多湿な自然環境などにより，腐敗したり，カビが生えたり，あるいは虫やネズミなどにかじられたものが，最終的には人の手によって廃棄されたこと，④ ラーンサーン王国期の隣国による侵略の結果，多数の文書が焼却されたり，持ち去られたりしたこと，⑤ 20 世紀後半のインドシナ戦争中に多くの村々が爆撃を受け，家屋とともに文書も焼失したこと，などがあげられる。加えて，⑥ 1975 年の社会主義革命の前後，混乱した社会状況の中で焼却され，廃棄された文書も少なくなかったであろう。

しかし，である。先に述べたバイラーン文書は，同様の自然環境の下で戦禍を被りながらも 37 万束を越える膨大な量が，今なお全国の寺院に保存されているではないか。それに，私がインタビューを行ったお年寄りたちは，「子どもの頃，見たことがある」と口を揃えて証言しているのである（もちろん，それらが私の捜し求めている行政文書かどうか定かではないが）。たとえ，作成された文書の量自体が少なかったにせよ，わずか数十年の間にきれいさっぱりと消えてしまうものだろうか。その疑問が，「（文書は）本当に全部なくなってしまったのでしょうか」という A さんへの問いかけになったのである。

「君はまだまだだな」という A さんのつぶやきに当惑し，言葉を失っていると，彼は「ラオス史料論」の講義を始めてしまった。

「史料とは何か？」一呼吸おいて A さんが続ける。

「史料とは母親の乳房のようなものだ」

一瞬，ラオス語を聞き間違えたのかと思った。「史料」と「乳房」が頭の中で結びつかなかったからだ。困惑を浮かべる私を一瞥すると，A さんは得意そうに説明を始めた。「普通，女性の乳房というものは他人に見せるものではないだろう。乳を飲む我が子と夫以外には見せてはいけないものだ。史料も同じことだ。分かるか？」

A さんの譬えが的確であるか否かはさておき，なぜ，先祖から受け継いだ文書を他人に見せてはいけないのか。A さんだけでなく，ラオスの歴史研究者

たちは，「ラオス人は，金銀財宝であれ，なんであれ，祖先から受け継いだものについては，それらを所有していることさえ口外するなと祖父母や両親から厳命される。古文書も例外ではない」と説明してくれる。財産価値のあるものについて，その所有を口外しないというのは分かるとしても，どうして古文書がそれと同じ扱いを受けるのか，疑問も涌かないわけではない。しかし，とにかく「他人に見せるなと命じられたから，見せてはいけないのだ」という極めて単純な理由が最大の理由らしい。まして古文書を他人に貸して，もしそれが返って来なかったら，それこそ「ご先祖様に顔向けができない」ということになるのだろう。したがって，古文書のありかを尋ねられたとき，とりあえず「今はもうなくなってしまった」と答えておくというのはごく自然な対応なのだ。

さらに少し前までなら，政治・社会状況も影響していたように思う。1975年の社会主義革命を機にラオスの社会構造は一変した。王族は言うに及ばず，旧体制下の高級官僚，地方国首長，在地の有力者および大商人などの一族は，先を争うように国外に逃亡していったが，中には何らかの理由により，ラオスに留まった人々もいた。いずれにせよ，旧体制下で行政文書に触れる機会があったのは，まさにこういう人たちだったのだ。だが，ラオスに留まった旧支配者層にとって，自分と一族の「過去」は固く封印しておかなければならないものだった。また，先祖から受け継いだ古文書の内容が，現在の政治・社会状況の中で特に差し障りのあるものとは考えられないものであったとしても，そうした文書を所持しているという事実が，旧体制下で支配者の側にいたことを示す動かぬ証拠になってしまうのである。この種の文書は，一族の中だけで密かに継承されていくべきものなのだ。[2)]

いずれの理由にせよ，見ず知らずの外国人にいきなり古文書のありかを尋ねられて，二つ返事で見せてくれるようなおめでたいラオス人はいない。これまで私はそうした事情に対してあまりにも無神経でありすぎた。それだけで歴史研究者失格であり，Aさんの言葉を借りれば，歴史研究者としては「まだまだ」なのである。

Aさん曰く，「古文書を個人で保管している人はS県内にも結構いる。しかし，彼らは自分がそれらを持っていることさえ，他人には言いたがらない。かりに持っていることを打ち明けてくれたとしても，なかなか実物を見せてくれない。私も古文書の持ち主の元へ何度も何度も足を運び，それでようやく見せてもらったりしているのだ。もっとも，かなり心の広い人でも，コピーや写真撮影はもちろん，その場で筆写することさえなかなか許してくれないが……」「でも……」と私は恐る恐るAさんに質問した。「せっかく古文書を見せてもらっても，それを活用して研究したり，翻字刊行したりすることに古文書の持ち主が同意してくれないのであれば，結局何もできず，意味がないのではないでしょうか」。Aさんはこれまで書き溜めてきた『S県史』の手書き原稿を見せながら，「その通りだ。私は自分の知り得たことのうち，ごく一部分しかここに書いていない。だが，今は公表できない情報や史料も（この『S県史』とは別に）どこかに書き留めて保管しておけば，私が死んだ後 ―― 50年後あるいは100年後かもしれないが ――，それを使ってS県の歴史を研究する人が出てきてくれるかもしれない。その時のために，古文書の持ち主の同意が得られれば，可能な限り実物を見せてもらい，筆写するなり，写真を撮るなりして，次の世代に伝えていくことが一番大切なのだ。研究云々はずっと先の話だ……」。Aさんは「伝える人」になろうとしているのだ。

私はこれまで，「ラオスで何をしているのですか」と尋ねられれば，臆面もなく「ラーンサーン王国の歴史を研究しています」などと答えていた。今思えば，赤面ものである。ラオス史に本気で取り組もうとするなら，ラオスの人々の古文書に対するさまざまな思いを理解することから始めなければならない。そして，自分の足で村々を回り，人々に私という人間を理解し，信頼してもらわなければならない。そうした過程を踏まえたうえで，もし，門外不出の古文書を見せてもらえる機会が与えられたなら（公表できるか否かは別として），それらをできる限り忠実に記録し，後世へ伝えていくことに力を注ぐ

2）行政文書以外にも，かつての地方国首長や在地の有力者の末裔の中には，一族の「家系図」を今なお保持しているという話も聞いているが，まだ実物を確認するには至っていない。

べきなのだ。A さんの言う通り,「研究」はずっと先の話である。

最近，私はS県を訪れるたびに，A さんの現地調査に同行させてもらい，村々の長老や僧侶への聞き取り調査および『S 県史』掲載用の写真撮影などを手伝っている。私自身の調査旅行と言うより，A さんに弟子入りして「伝える人」になるための修行をしていると言った方が実態に近いような気がする。晴れて「免許皆伝」となるときが来るのかどうか，それは分からないが，ラオス古文書の世界を縦横に駆け巡る日が来ることを夢見て地道に努力していきたい。

私のラオス史への取り組みは，始まったばかりである。